小さいのは嫌いじゃない

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
小さいのは嫌いじゃない

【Ｎコード】
Ｎ７０２２Ｒ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
小柄な幸恵はその小さいことを気にしている。それで大樹にこのことを話すと。Ｓｍｉｌｅ　Ｊａｐａｎ企画作品です。この作品でほっとされればいいのですが。

第一章

小さいのは嫌いじゃない

南城幸恵は小さい。その背は一四五もない。

高校ではダントツで小さい。あまりに小さくて全校集会で欠席にされそうになったり入学式で本当に小学生と間違えられたりしてきた。当然そのことにコンプレックスを抱いている。

そんな彼女だが髪は長く伸ばし膝までである。しかもまだ伸ばしている。大きな丸い目に眼鏡をしている。顔立ちも童顔だがその髪の毛がとにかく目立っている。

その彼女にだ。クラスメイトの柊大樹が問うのだった。黒髪のはっきりとした目の少年で背はかなり高い。特撮俳優の中に掃いてもまだ高い、そんな高さである。

その彼がだ。幸恵に問うのである。

「何で髪の毛伸ばしてるの？」

「だって。私背が低いじゃない」

その大樹、殆ど一九〇ある彼を見上げての言葉だ。本当に首が直角になってしまっている。そこまで見上げて話をしている幸恵だった。

「だからね。こうして伸ばして」

「髪の毛を伸ばしたら背が伸びるとかいうのかな」

「そうよ。頭が引っ張られてね」

それでだというのだ。

「背もって。どうかな」

「それ関係ないと思うよ」

大樹もまた首を直角にしている。ただし彼の場合は見下ろしている。そのうえで自分の真下にいる幸恵と話をしているのである。

第二章

「髪の毛は」
「そうかな」
「そう思うよ。けれどそんなに小柄なのが気になるの？」
「なるわよ。当然じゃない」
困った顔で大樹を見上げてだ。そのうえで彼に言い返すのだった。
「私、一四五ないから」
「それでもっと背が高くなりたいんだね」
「こんなのじゃ。子供扱いされて」
実際にそうされてきたからこその言葉だ。彼女にとってはいい話ではない。小柄なことが何よりのコンプレックスであるからだ。
それでだ。大樹に対してその大きな目を顰めさせて話すのだ。
「誰かと恋とかそういうこともできないから」
「だから背が高くなりたいんだね」
「そうよ。こんなのじゃ」
「何だ、じゃあ背が高くなる必要はないよ」
笑顔で言う大樹だった。幸恵に対して。
「恋がしたいんならね」
「どうしてなの？それは」
「じゃあ言うよ。よかったらさ」
その笑顔でだ。幸恵に対して続ける。
「僕と付き合ってくれない。ずっと前から好きだったんだ」
「えっ、それって」
「だから。どうかな」
また告げる大樹だった。
「僕とね」
「えっと、じゃあ」
幸恵は最初は言葉を飲み込めなかった。しかしだ。

次第にその言葉を理解していって。顔を赤くしてだ。そして彼を真上に見上げたままで。こう答えたのだった。

「私でよかったら」

「有り難う」

大樹も満面の笑顔で応える。こうしてだった。幸恵はそれから自分が小柄であることを前程意識せずに済むようになったのだった。彼女にとっても大樹にとっても幸いなことにである。

小さいのは嫌じゃない　　完

２０１１・３・１７

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7022r/

小さいのは嫌いじゃない

2011年3月22日15時55分発行